

中国残留兵を描いた『蟻の兵隊』

山口 洋司

8月に元町映画館で「蟻の兵隊」(池谷薫監督)というドキュメンタリー作品が上映されました。2005年の製作ですが、戦後80年を記念してのアンコール上映です。初上映時はそんなに話題にならなかったのですが、今回連日満席で入口に、満席になるので早目に整理券を求めてください、と張り紙がでるほどでした。初めて見る現象でした。

終戦になって、中国の山西省にいた陸軍第1軍の日本軍兵士2600人が上官の命令で、武装解除せず中国の国民党に合流、共産軍との内戦に参加しそのうち550人が戦死、770人が捕虜になるという史実がありました。あまり知られていませんが戦後も中国に残留して中国の内戦を戦ったのです。

残留兵だった奥村和一さんは軍と国の責任を明らかにするため仲間と裁判を起こすんですが国は勝手に残留したのだと主張し責任を認めようとしません。敗訴します。

上告のための証拠集めに山西省へ出向く奥村さんを映画は執拗に追っていきます。初年兵教育との命令で中国人を己が銃剣で刺し殺した現場にも立ちます。被害者であると同時に加害者でもある。蟻のごとく命令のまま淡々と戦っただけだが、あの戦争はいたい何だったのかをあらためて検証していきます。



敵前逃亡していった元軍幹部、残留兵らをも尋ね、追ってもいきます。圧巻は靖国神社の大祭り、日の丸掲げ、旧軍服姿の復古パレードの賑わい、そこで挨拶した戦後29年ぶりにフィリピンの山奥から帰還した旧軍人小野田寛郎さんを捉えて、<戦争を美化するな! >と激しく詰め寄っていくところです。すごい気迫です。

奥村さんの後半の人生をかけた執念の行動が感動的です。上映の後挨拶に立った池谷薫監督は<戦争はいかに人間を変えるか>、<国家はデカイうそをつく、それに対して奥村さんは人間の尊厳を求めて闘った。今日の森友問題も同じ構図>、ひとりでも多くの人に真実と、戦争というものを知ってもらいたいと、強くアピールしました。

その池谷監督、映画館上映だけでなく、若い人にこそ知ってもらいたい。と各大学に作品を持って回り、講演をしています。今年だけで17大学で予定が入っているとのこと。そこで学生と熱い議論をする、と言います。映画もさることながら監督の上映活動はひとつの運動とも思えました。監督の執念に頭が下がる思いでした。

(奥村さんは映画が完成して5年後86歳で亡くなり、最高裁は上告を棄却しました)